

「MEGURUNODA」

|                |      |
|----------------|------|
| 1. ピーピー        | 4:28 |
| 2. ほとんど神だ!     | 3:59 |
| 3. キミと雪        | 3:42 |
| 4. ワンモー22      | 3:29 |
| 5. 風ニ吹カレテ      | 3:48 |
| 6. ピンク         | 4:38 |
| 7. メイビ         | 4:06 |
| 8. 月を見てる       | 3:36 |
| 9. よっちゃんとかっちゃん | 4:16 |
| 10. メグル        | 4:21 |
| 11. ワンモー21     | 3:36 |

Total 44:01

作詞 砂久ヤタロウ

作曲 砂久ヤタロウ

歌と演奏 砂久ヤタロウ

1. 「ピーピー」

駆けてくんだって 息を吐きながら

ケツを向けたまま 背中に感じる  
ケツが汚れてる・・・

うそだよ ハハハ

ヒモがほどけてる

うそだよ 見るなよ

ふりかぶったNO1 声を吐き出す

ピーピー

スモーク付きのcar 1時間ほどのブーブー

夢を見ながら 今日は 走れそうだね

セットポジションNO1 左手が上がる

リーリー

さあ片付けてよ 坂田よろこぶ さあ肩まわして

ヘーイヘイ ピーピー

悔し涙は 黒い袖にしみこんで  
息切れする身体に 呪いを

いつまでも漂う黒い帽子

ひさしぶり ひさしぶり

また会ったね  
ぼくの声がきみに届くなら  
誰もいない  
誰かいるね  
それならば  
おそれないで  
エンジェルベイビー  
イワマタノボル(陽はまた昇る)  
ぼくの声がきみに届くなら・・・

## 2. 「ほとんど神だ!」

涙ながらに すがりつく  
それさえも  
できぬままに 肩を抱いて  
立ち止まる

なにか言おうとするが  
言葉が出てこない

グラフの先に 見えるのは  
きみの笑顔

6人だけが 計画通り  
楽しむゲーム

人々はまた 気づかぬまま右左  
弱い電波の声は 今でも  
スルーされる

深読みなら いつでも陰謀に  
たどりつく

我々は ほとんど神だ! Oh yeah

我々は ほとんど神だ! Oh yeah

彼らは わからないさ  
理解できっこないさ

”神”の作ったシステム

我々だけが知ってる

我々は ほとんど神だ! Oh yeah

我々は ほとんど神だ! Oh yeah

目をつぶってれば 比較的  
うまくやれる

目をつぶってれば 気づかぬままに  
終わる

目をつぶってれば すべてが  
フィクション

フィクション

全てが フィクション・・・

### 3. キミと雪

足をとられて つまづいてみる  
前にたおれて

雪をかむ

静かな朝は あしたの扉  
息を吸いこんで 起き上がる

手をふりながら かけ寄ってみる  
二人してたおれて

雪をかむ

赤い顔をして 白いステージへ

キミは 雪のカタマリを  
もう ぼくに投げる準備

走りまわり 雪をひろって

投げては 逃げる

笑いながら 逃げる・・・w

大人のキミは ときどき子供のように  
雪の景色を 走りだす

赤い顔をして 白いステージへ

キミは 雪のカタマリを  
もう ぼくに投げる準備

ひさしぶりに つまづいてみる  
前に たおれて

雪をかむ

あわてて かけ寄って  
そして すこし怒って

キミは 雪のカタマリを

もう ぼくに投げる準備

もう ぼくに投げる準備

### 4. 「ワンモー22」

誰かの歌が 聞こえてる  
聞いたことが ありそうだ

閉じられた 窓の奥に  
ほら かすかに聞こえてる

見失った 旋律が  
頭上を 通りすぎる

風が 吹いている  
夜の空間に 流れている

思考の群れが 流れている

煌びやかな 音像に  
人々が ふるえてる

それでも 君のその声は

このぼくが 聞いている

風が 吹いている  
夜の空間に 流れている

思考の群れが 戯れてる

歩いてる 夜の通りを

あの場所に だれがいるだろうか

風が 吹いている  
夜の空間に 流れている

思考の群れが 流れている

風が 吹いている  
夜の空間に 流れている

思考の群れが 戯れてる

#### 5. 「風ニ吹カレテ」

踊るふりで ポーズ  
指を指したほうへ

視線をなげる 並んだピーポー

さばけるほどに えらくはないさ

風ニ吹カレテ 声が聞こえる

見失った ゾンビ  
おでこを ひと突き

仮装のまま 敵になる

騙されてるのは だれなのだろう

開いたままの 「善の根拠」

なにもかもなんて  
わかるわけないさ

哀れな小鳥に パンくずを

風ニ吹カレテ

丘のうえまで  
海を 見ながら

ヒラメキを 待つ

モヤモヤのなかで モヤモヤしている

風邪でもひいたら 思い出さだろう

なにもかもなんて  
わかるわけないさ

哀れな小鳥に パンくずを

風ニ吹カレテ

丘のうえまで  
海を 見ながら

ヒラメキを 待つ

波の調べが 胸にせまる

わからないふりで わかっている

風ニ吹カレテ

丘のうえまで  
海を 見ながら

立ち上がるのさ

風ニ吹カレテ・・・

#### 6. 「ピンク」

窓の外は モノクロの空

夢の中で 青い空を見たばかり

地面がしずかに 音をたてて  
まだら模様になら 染まってゆく

はげしい雨が ふり始める

濡れたネコは 白いテントの下  
あそこのグループが 歌いはじめる

思い出ばかり 身体をつつむ

おなじ歌を くりかえし  
おなじダンスに 舞う

だれかが飛ばした 風船が

黒い空に きえてゆく

空を見上げた その頬が  
生ぬるい風を 感じてる

肩をだいて ささえるように  
しずくが君に 問いかける

君は おもいだす

地面がしずかに 音をたてて  
まだら模様 に 染まってゆく

はげしい雨が ふり始める

はげしい雨が ふり始める

## 7. 「メイビ」

割れたガラスの すきまから  
青い空が みえる

下の道路から 見知らぬ

外国語が 聞こえる

風に吹かれた 紙切れが  
落ち葉のように 舞う

まるいスピーカーの  
誘い文句

壁に当たって はねかえる

君の理想が ゆらゆらと  
空中を ただよう

両手を広げ 片足で  
バランスをとっている

前をむいて 遠くを見てる

つめたい風が めくりあげる

空の向こうに 広がっている Ah

海の向こうに 広がっている Ah

君のまわりに 広がっている

街のひかりに 夢見てる  
トリトメノナイコト・・・

自分自身を とりもどす

君はおもいだす

空の向こうに 広がっている Ah

海の向こうに 広がっている Ah

君のまわりに 広がっている

## 8. 「月を見てる」

机を蹴って つばを飛ばす  
議論の上に モヤモヤと

繁栄の欲求が 平均のバランスが

通りの行進が みえている

求める人が いつしか  
たどりつく

昨日はこぶしを ふりあげて

顔をしかめ 叫んでた

滅びましょう ヤツは言った  
滅びましょう ヤツは言った

滅びましょう ヤツは言った

その姿を 月が見てる

戦いましょう ヤツは言った  
戦いましょう ヤツが言った

戦いましょう ヤツは言った

その姿を 月が見てる

月が見てる

月が見てる・・・

月を見てる・・・

#### 9.「よっちゃんとかっちゃん」

こころの弱さが いつも  
だれかを 傷つける

音に囲まれた ここは  
ぼくらの要塞さ

ギターの音が 君の胸にとどくまで

たぶん明日も この空気を  
震わせる

空を超えて 君のシーンが届く

リズムにあわせて くちずさむ

ぼくの歌はもう 君しか  
きいてくれないね

ぼくのポケットから  
そんな君に これをあげよう

こころの弱さが いつも  
君を 傷つける

こんな時間に 君の鼓膜がふるえる

しずかな夜が 朝に変わる

揺れる思いが オドケタしぐさになる

つまらぬ想いを 笑顔に変える天才さ

離れてたところがまた 近づいていくな  
街の景色も 違ってみえるのだろう

つながりを求めて 手足をのばしても

ぼくの歌はもう  
君にしか 聞こえないね

離れてた心がまた 近づいていくな  
街の景色も 違ってみえるのだろう

つながりを求めて 手足をのばしても

ぼくの歌はもう  
君にしか 聞こえないね

君にしか 聞こえないね

#### 10.「メグル」

息を吐きながら  
坂を のぼってみる

湿った風がもう  
ゆっくりと よこぎる

おねのポンプが 血液をめぐる

映像がほら クリアになる

遠い空の 青が見える

海の光が 流れてる

両手をあげて 目をとじる

スニーカーをまわして  
空に 投げてみる

片足で バランス

風が ふいている

遠い空の 青が見える

海の光が 流れてる

両手をあげて 目をとじる

両手をあげて 目をとじる

## 11. 「ワンモー21」

砂場で 遊びながら  
懐かしさを もとめてる

うまくできた山の上に  
登ってみるのも いいね

朝日を 浴びたら

きっと目が 覚めるかな

きみの歌う声が 風によって  
誰かのくちぶえの メロディになる

夢に見た光景を 誰かに伝えるのは

まるで水面を 指でなぞるようさ

きみの歌う声は グループをこえて  
あの空のその先を 目指すのだろう

目を閉じて その歌が聞えるなら

それはきっと 誰かが夢見たシーン

きみの歌う声が 風によって  
誰かのくちぶえの メロディになる